

コロナ禍でみえた身近な地域

藤本 真里（兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 准教授）

コロナで見てきた「歩いていける地域」

2020年4月に発令された緊急事態宣言で、生活は一変しました。世界中を巻き込むコロナ感染拡大による被害規模は、これまでに経験したことのないものです。震災のように橋やビルが倒壊するなど目に見える被害はありませんが、経済的な打撃は、はかり知れません。しかも、コロナ禍は、多くの人々のライフスタイルを劇的に変えることになりました。

私は、一時期に在宅勤務となり、日に1時間くらい散歩するようになりました。昨年引っ越したばかりで、現在の自宅は植木の町、宝塚市の山本にあります。引っ越し先の様子をよく知らなかったこともあり、1時間で歩いていけるところは、ほとんど行き尽くしました。立派な庭がつづく道、お地蔵さんの多いゾーン、予想外に広い造園業者のバックヤード、そこに揃えられた多種の樹木、坂上頼泰公（木接太夫）を伝える碑、美味しいコーヒー豆を売っている店、駅前から少し歩いただけで行ける別世界のような溪谷にある最明寺の滝など、一人で歩いただけでも、見つけられるものがたくさんありました。

身近な場所に感動するものを見つけることは、予想外にワクワクする作業です。コロナ禍は、これからも続きます。他府県に移動できない、在宅勤務が増えるなどの理由で、身近な地域との関わりがこれまでよりもずっと深くなるでしょう。それは一方では、地域を深く知る機会とも言えます。

地域の魅力を再発見

島原万丈は、「本当に住んで幸せな街～全国「官能都市」ランキング」（光文社）で、他者との関係性、五感で感じる身体性を基準に街を再評価しています。8つのジャンルごとに4つの評価項目があります。例えば、「買い物途中で店の人や他の客と会話を楽しんだ」（ジャンル：共同体）、「カフェやバーで一人で自分だけの時間を楽しんだ」（ジャンル：匿名）、「公園や路上で演奏やパフォーマンスをしている人を見た」（ジャンル：街を感じる）、「木陰で心地よい風を感じた」（ジャンル：自然を感じる）、「遠回り、寄り道していつもは歩かない道を歩いた」（ジャンル：歩行）といった具合です。このような質的な評価から、まちの雰囲気、居心地を感じるすることができます。

これまでの都市のランキングを示す評価指標は、公園の面積、公共施設の数、病床数、空き家率などでしたが、どこか、それだけじゃないと感じていませんでしたか。上位にランキングされれば、なんとなく自慢になるけど、ランキングは、具体的なまちのイメージや魅力を伝えるものではありませんでした。

職場にさえ通勤できなくなった状況で、身近な地域を見つめ直すことになって、私なりに「官能都市的評価指標」が思い浮かんできました。「近くの公園ではじめて会った人と会話を楽しんだ」、「近くの居酒屋で一人の時間を過ごした」、「お地蔵さんに供えられた生花に癒される」、「他人の庭を楽しみながら散歩できる」などなど。住んでいる人、訪れたことのある人にしか感じることでできない現象や人とのつながりを、五感で感じとり評価する指標さがしは、身近な地域の魅力を再発見するきっかけづくりに最適な作業です。

利用する人の工夫で価値があがる屋外空間

私は、公園のマネジメントに関わっているのですが、身近な空間の中でも、とくに公園を訪れる人の様子が気になります。家の近くに広大な芝生広場があります。ラジオ体操、走り回る小さな子供連れの家族、ゆっくり散歩する高齢者夫婦、愛犬を連れた散歩、自転車に乗った小学生、寝転がって読書・ゲーム、友達や家族でランチ、ベンチに座ってゆっくり休む、池の鯉をながめる、などなど、広場を利用する人の様子は、コロナ禍以前より多種多様です。コロナ感染への対応で互いにたいへんな中、公園でくつろぎたい気持ちはよくわかります。いろいろな活動を認め合える空気があったようにも感じました。一般に広大な芝生広場は、設備も遊具もなく、利用者が少ない傾向がありましたが、昨今は、そこにテントや遊具を持ち込み、それぞれがやりたいことで楽しむようになりました。遊具や設備で使い方が限定される屋外空間より、自由に使える芝生広場の方が、コロナ禍では重宝したようです。利用する人の工夫で価値があがる屋外空間には、いろいろな可能性がありそうです。

最近、ひとはくの周辺にある深田公園では、座り込めるシートの上に約 150 冊の絵本を並べた「えほんの国」、寝そべるためのシート、家族などでランチに利用できるテントなどを配置し、そこでゆっくりくつろいでもらったり、お話するきっかけを作るためコーヒーサービスをしたりするなど、集まった人々が思い思いに過ごせる場―「そとはく」をつくらうとしています（写真 1）。これは、「公園でこんな楽しみ方もできますよ」というよびかけでもあります。



写真 1 ひとはくのエントランス近くの芝生広場にテントやコーヒーサービスカウンターをセッティングした「そとはく」



写真2 たくさんのあそび道具の中から好きなものを選べる「あそびカウンター」

また、有馬富士公園の休養ゾーンにある広大な芝生広場で「あそびカウンター」（写真2）をセッティングし、ボール、フリスビー、凧などの遊び道具を無料で貸し出しました。大きな広場で多くの人々が「あそびカウンター」を利用し、いろいろな遊びをしている様子を見てみると、私も嬉しくなります。運用には何の問題もありませんでした。使いすぎてだめになる道具もありますが、仕方ありません。みなさん、「すみません」と謝りながら返してくれます。最後は、いっしょに片付けてくれる人々もいます。あそびカウンターにいと、いろいろな人が話しかけてくれます。「何でこんなことをしているのか」、「なぜ、ここにきたのか」、「どこから来たのか」、「こんなことをしてほしい」、「ありがとう」など、このような会話で得られる情報も貴重です。これらの会話が、「公園で知らない人と会話を楽しんだ」という経験につながり、さらに休養ゾーンへの愛着につながれば、うれしいことです。

これらの事業は、人と自然の博物館の環境計画研究グループが中心となって実践しています。専門家がいないとできないことではありません。他の公園などでも、真似しまくってもらえたらよいと思っています。

身近な地域の資源を掘り起こすという作業は、まちづくりの中で地域を知るためによく行われます。住んでいる人ほど、その地域の魅力に気づいていないことが多いからです。よく「私のまちには何もない」という人がいますが、それは、観光資源になるような有名なものがないという意味でしょう。地域資源がないまちは、存在しないと思います。何もないというのは、掘り起こすことをしていないからです。

コロナ禍で何度も地域を歩いていると、いろいろなことがわかってきます。日常をとりまく見慣れた風景の中に、意外な履歴を積み重ねること。それが、私が最近ハマっていることで、いろいろな人に解説しています。